

(2017年文校夏期合宿用作品 テーマ「もも」)

桜桃忌^{おうとう}

津木林洋

早朝、彼は墓の前に立った。二年前に愛人と心中した男の名前が刻まれている。去年ここで男を偲ぶ会が催されたが、彼は全く関心を示さなかった。というより、男を嫌っていたので誘われても絶対に行くものかと思っていた。

ところが最近、男の墓が森鷗外の墓の側に建てられていることを知ってやってきた。

彼は四年前に一度だけ男に会ったことがある。その時男は鷗外について「全集に軍服姿の写真だぜ、何だい、ありや」と揶揄したのである。彼は鷗外を擁護したが、酔った男はへらへらと茶化すだけで相手にしない。むかつときた彼は「あなたの文学は嫌いなんです」と言い放った。男は虚を衝かれた顔をしたが、「そんなことを言ったって、こうして来てるんだから、やっぱり好きなんだよな」と呟いた。

後で、男の、鷗外に対する揶揄は尊敬の裏返しであることを知ったが、そのひねくれた心理には寒気がした。

見ると、確かに鷗外の墓が斜め向かいにある。

「お前の作品など鷗外の足元にも及ばん」

と彼は男の墓を指差した。さらに、最近体を鍛え始めた彼は、

「お前の悩みなど乾布摩擦をしたら消えるレベルだ」

と言い放った。その時、小説を書くとは主人公を演じることだよという男の言葉が蘇った。馬鹿な警^{アフオリズム}句だと、彼は鼻で笑った。

墓地を出る時、一人の男とすれ違った。

「三島くんか」

彼は聞こえない振りをして、そのまま行き過ぎた。

二十年後、彼は自分の書いた作品の主人公のように割腹して果てた。